

アベサンショウウオ 京都、兵庫、福井、石川

体長10センチ。日本の固有種で、京都や日本海側の4府県の狭い範囲で生息が確認されている。河筋の細地や休耕田の畔の水路などにすむ。クマヤシミズなどを食べる。生息地が人の生活する場所と重なっているため、開発による環境変化で生息地が減少している。アマリカサリガニやアライクマといった外래種に食害られたり、ペット目的で不法採集されたりするなどの影響も懸念されている。



アベサンショウウオ 環境省提供

アマミノクロウサギ 鹿児島・奄美大島、徳之島

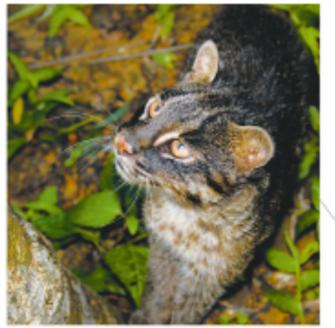
奄美大島と徳之島の固有種で、全身が黒色の細れた短い毛で覆われている。生息数は1万4千頭程度(推定)。体長約10センチで、他のサギと比べて目と耳が小さく、手足も短く短い。夜行性で動きはのろく、わんわん音のためにはたかを恐る。開発による森林減少で生息した場所が失われたほか、交通事故死が懸念されている。一方、捕食者(マングースなど)の捕獲の効果で、生息数は増加傾向にある。



アマミノクロウサギ 環境省提供

イリオモテヤマネコ 沖縄・西表島

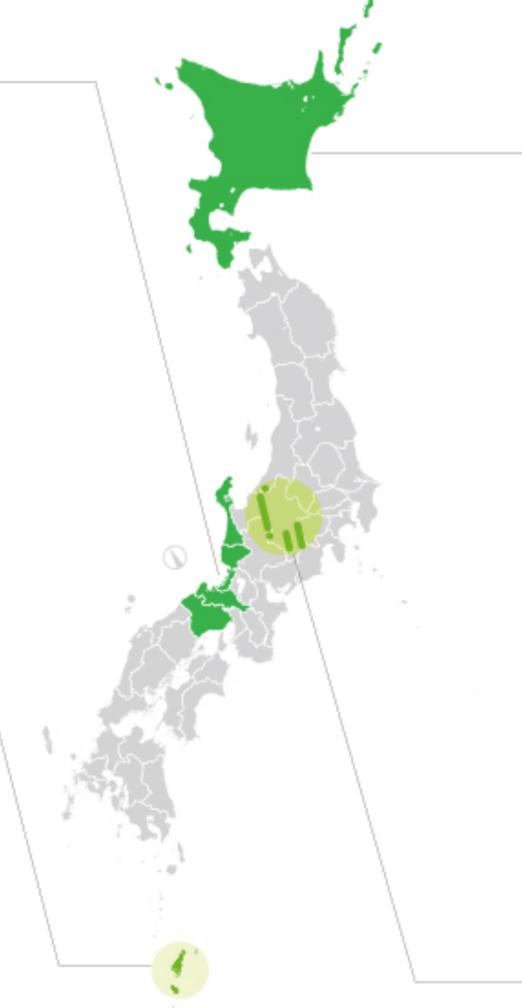
西表島の山麓から稀にみられる低地部にすむ。生息数は100匹程度。体長50センチまで、全身に斑点模様。毛に短くまばらな模様があるのが特徴で、1967年に新種として記載された。主に夜行性で、特に日暮れ時や明け方に活発に動く。樹に上るとその小型哺乳類が少いため、鹿やイノシシ、リスなどの小型哺乳類を食べる。交通事故やネコ由の感染症などによって生息数が減少している。



イリオモテヤマネコ 環境省西表島野生動物保護センター提供

絶滅から救い出せるか

国が保全を進める絶滅危惧種の例



オオワシ 北海道など

翼を広げると2メートルを超える国内最大級の猛禽類。体は黒褐色で羽の一部が白く、鮮やかな黄色のくちばしと目を持つのが特徴。ロシア極東で繁殖し、北海道東部を中心に国内各地で越冬する。水辺で魚などのエサを捕り、周辺の森林をめぐらとする。森林減少のほか、船舶の航行で撃たれたシカの死体を食べることで船舶中毒や交通事故、感電事故で生息数が減っている。

生物多様性を守るため、一連たりとも取り残さない。現在は「絶滅の大瀬絶滅種」に指定され、地球上では約3000種(推定)の生物のうち、毎年1万種程度の絶滅が起きていると推定。絶滅の危機に瀕する生物を保護し、増加に転じさせることが求められている。

生物が絶滅に追いやられる脅威には開発や外来種の侵入のほか、地球温暖化による生息環境の悪化や人間の活動が関係している。一方で、人間の手による絶滅回避も可能である。

日本では絶滅の防止法(国)き、国内で絶滅の恐れがある動植物を「国固有の野生動物種」(希少種)に指定し、保護などを強制している。今年2月時点で448種が指定されている。

希少種の中でも、特に繁殖を促めたり生息地を確保したりしなければならぬ種については、政府が計画を立てて個体数を増やすための事業を実施している。これまでに計画を作ったのは、イリオモテヤマネコをはじめとする固有種など16種による。

対策は交通事故対策や外来種の駆除、繁殖場所の確保など多岐にわたる。トキやタンチョウなど個体数が回復している種もあり、事業開始後、10種が絶滅危惧種のレッドリストで絶滅の危険度が改善されたという。

10種で危険度改善

ライチョウ 本州中部



ニ勝野の中央アルプス・駒ヶ岳山頂近くで2023年10月、衣石信一撮影

水辺でユーラシア大陸から日本列島に移り、また高山帯に定着した水鳥類の生息地。冬は雪と降り白い冬羽、夏には高山植物の間で目立つ白く、黒のまだら模様の夏羽に生え変わり、天敵から身をを守る。繁殖期には羽を高く高く上げて「ケンケン」などの鳴き声が聞かれるようになるなど、生息環境が脅かされている。動物園で繁殖させ、母牛復元させようという試みが始まっている。

世界環境デー 地球環境問題に関する初の政府間会議「国連人間環境会議(ストックホルム会議)」が1972年6月5日から開催されたことを記念し、国連が毎年6月5日を「世界環境デー」と定めた。環境への関心・理解を深めてもらい、環境保全のための行動を促すことを目指す。日本では、93年成立の環境基本法でこの日を「環境の日」と決めた。



水中に網を張るヤエヤマヒルギ 三日月も沖崎県竹島町の西表島で5月、瀧川史撮影



木の枝に止まるリュウキュウアオバズク

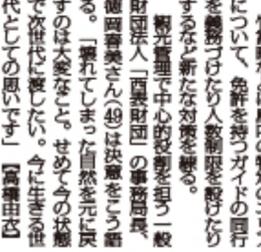


茎をつかむヤエヤマアオガエル

支え合いが育んだ多様性



干潮時に潮穴から出てきたミナミヒメシオマネキ



雨の日に姿を現したヤエヤマゼマルハコガメ

雨上がりの暖後、ヘッドライトの明かりを頼りに亜種特有の樹木が茂る森を歩いた。ぬかるむ道元には、オオムネヤシガニがごろごろとく。 「ホ、ホ」。鳴き声の主を察して木を昇ると、まん丸の黄色い目をしたリュウキュウアオバズクがこちらを覗いていた。 琉球列島南西部の西表島(沖崎県竹島)は生物多様性の宝庫だ。生物多様性は、個性豊かで多様な生物が、変化に富む生態系の中で互いに支え合いながら生きていることを指す。ある種の個体数が減ったり絶滅したりすれば、その影響は他の生物にも及ぶ。 沖崎県の日本復帰(1972年)と同時に、国は島を日本最南端の国立公園に指定。2022年には奄美大島と徳之島のいずれも鹿児島県、沖崎県北部と共に世界自然遺産に登録された。 島のシンボル、絶滅危惧種のイリオモテヤマネコは、アジアに広く分布するスナガリヤマネコの亜種だ。島の食物連鎖の頂点にいた。 「警戒心が強く、簡単に思われる動物じゃなかったけれど、気配はよく感じましたよ。10羽いたはずのニワトリのヒナが気づいたら5羽になっていた」ともあった。でも、水田は荒らさなかった。人間と共存していたんだ。 島で生まれ育った平良彰徳さん(80)は、瀬内川流域の旧稲穂地区で暮らした子ども時代を振り返る。15世帯ほどが家を構え、水牛やニワトリを飼い、畑作を営んでいた。イリオモテヤマネコが絶滅に近づいていた。 とは何となく気づいていた。 約100年前、琉球列島は1717年(大正)に地盤がたつた。大規模な地震動や津波で、現在の島々が形成された。この過程で約200万年以前以降、イリオモテヤマネコの祖先が大陸から西表島にやってきたとされる。 主に小型の哺乳類を食べるネコ科の強が、目の限られる小さな島に生息しているのは世界的にもまれだ。イリオモテヤマネコは島嶼、両生類から昆虫、甲殻類まで多様な生き物を捕食できるような進化を遂げた。 だが、人間の昔がイリオモテヤマネコを追い詰めた。 旧稲穂地区はかつて、イリオモテヤマネコの繁殖地になっていたと知られる。ところが1988年の水害の後、最後の住人だった平良さん一家が島の地を離れた。人の手が入らなくなり、土地は荒れた。イリオモテヤマネコの餌になるような多くの生き物を奪った。 島嶼一の幹線道路でイリオモテヤマネコが事故で死んだケースも後を絶たない。平良さんは「餌があったら里山がなくなると怖い下り下り。環境を奪え、元のすまかに戻すことが何より大事だ」と訴える。 竹島町には島の特定のエリアについて、危険を持つガイドの同行を義務づける人数制限を設けたりするなどの対策を講じた。 観光資源を中心とした観光地づくりを推進する「観光庁」の事務局長、徳田博之(80)は決意を込めて語る。「壊れてしまった自然を元に戻すのは大変なこと。せめて今の状態を次世代に渡したい。今でも生息地を確保している」「島田田代